

う思わざるを得ません。沖縄県民、侮るべからず。

さて、3年次生の主な基礎科目は1学期で終わり、新たに病理学が1学期末から、薬理学と公衆衛生学、そして呼吸器系や内分泌系、循環器系など各臨床科目が2学期初めから始まりました。病理学と薬理学は基礎科目という枠組みに分類されていますが、今までの基礎科目とは異なり、病理学では発生機序や組織像、臨床像を、薬理学では各薬の作用機序、副作用などを学ぶため、臨床科目に近いと感じました。また、両科目とも今まで習ってきた解剖学や生理学などの知識を必要とするため、それらの重要性を改めて気づかされるとともに、復習の必要性を再認識させられました。各臨床科目は病態生理だけでなく、新たに検査、治療といった側面からもアプローチするためより臨床医学を意識させる内容となり、医療従事者を志す者として抱えた動機がよりはっきりしてきています。公衆衛生学は人の集団、社会といった大きな規模を対象としており、それ故今までの視点と異なるマクロな視点で疾病、社会を捉えるため、新鮮に感じています。

一方、学士編入生は通常講義と平行し、6月末からおよそ一ヶ月間、解剖学実習を行いました。実習で得られたことはテキストから得られること以上に残っており、今も各臨床科目の講義で臓器に触れるたびに実習の光景が思い出されます。献体された篤志家の方、そしてそのご遺族の方々に感謝いたします。

また、10月には救急車実習に参加しました。救急救命の現場で行われる救急救命処置を目の当たりにすると同時に、救急隊が到着する前の一般市民による手当や蘇生、救急隊による救命救急処置と搬送、そして各病院の救急部による救命、これらが三位一体となることで救急医療が成り立っているこ



とを痛感しました。

飛び込むようにして琉球大学へやってきてから8ヶ月。2009年もあつという間に終わりを迎えようとしています。およそ1年後にはCBTが行われ、5年生より病院実習が始まります。そのため、学生という身分に甘んじることなく、医療従事者を志す者としての意識を持ちながら、目標に向かって歩んでいく次第です。

最後になりましたが、同窓会員のみなさま、そしてそのご家族のみなさまがよい年末年始を過ごされることを願っています。

病気ではなく、 病人を診る医師になりたい

阿部 聖（2年次）

小中学校時代に転校した経験のある方ならよく理解頂けると思うが、途中から学年に“入る”というのはなかなか勇気がいるものである。学士編入という形で琉球大学医学部にやって来た私にとっても、それは例外ではなかった。4月4日、期待と不安が入り混じった羽田発那覇行きフライト。あの時の感情は今も忘れない。しかしながら、私は私自身の意思でここにやって来た。親の仕事の関係で転校を余儀なくされたあの頃とは事情が違う。医師になりたいという強い意志があった。解剖実習が始まり、救急車同乗実習を経験し、試験勉強に追われる現在に至っても、その決意が揺らぐことはない。私には救いたい人がいる。この先にどんな困難が待ち受けていようとも、必ず乗り越えてみせる。その覚悟がなければ、今私はここにはいない。

沖縄に来たことが、私にとって大きな転機となっていることは間違いない。6月にひめゆりの塔と糸数壕（アブチラガマ）を初めて訪れたが、歴史と正面から向き合うことの重要性を再認識させられた。日本という国に生まれたからには、過去の戦争の話題を避けて通ることは出来ない。昨今の新聞紙面を賑わせている普天間基地移設問題を、身近な問題として切実に意識するのは、実際に沖縄で暮らしているからである。

医師になるからといって、単に医学的知識だけを学んでいればいいという訳ではない。誤解や先入